

これも今は昔、人のもとに、ゆゆしくことごとく斧を負ひ、法螺貝腰につけ、錫杖つきなどしたる山伏の、ことごとしげなる入り来て、侍の立部たてじとみの内小庭に立ちけるを、侍、「あれはいかなる人御坊」と問ひければ、「これは日ごろ白山に侍りつるが、御嶽へ参りて今二千日さぶらはんとつかまつり候ひつるが、齋料とぎれう（食べ物）尽きて侍り。まかりあづからんと申しあげ給へ」といひて立てり。

見れば額、眉の間の程に、髮際に寄りて二寸ばかり傷あり。いまだなま癒えにて赤みたり。侍問うていふやう、「その額の傷はいかなる事ぞ」と問ふ。山伏、いとたふとたふとしく声をなしていふやう、「これは随求陀羅尼を籠めたるぞ」と答ふ。侍の者ども、「ゆゆしき事にこそ侍れ。手足の指など切りたるはあまた見ゆれども、額破りて陀羅尼籠めたるこそ見るとも覚えね」と言ひ合ひたる程に十七八ばかりなる小侍のふと走り出でて、うち見て、「あな、かたはらいたの法師や。なんぞでふ随求陀羅尼を籠めんずるぞ。あれは七条町に、「江冠者くわんじやが家の大東に鑄物師が妻をみそかみそかに入り臥し入り臥しせし程に去年こぞの夏入り臥したりけるに、男の鑄物師帰り合ひたりければ、取る物も取りあへず逃げて西へ走る。冠者が家の前程にて追いつめられて、金專して額打ち破られたりしぞかし。冠者も見しは」といふを、あさましと人ども聞きて、山伏が顔を見れば、少しも事と思ひたるけしきもせず、少しまのししたるやうにて、「そのついでに籠めたるぞ」と、つれなういひたる時に、集れる人ども一度にはと笑ひたる粉れに逃げて住にけり。

「冠者、元服した者、ここでは話者の小侍が自分を指して用いている。」